

# 大境門



万里の長城の最北、独石口で蛇のように細長い土長城を見たあと、路線バスで悪路を張家口にむかう。宣化をすぎて3時間が経過したころ、忽然と出現した都会の喧嘩に巻き込まれ、バスは目的地に着いた。

大境門の長城は繁華な街並みがあった張家口市の北端に位置し、西太平山の尾根を這いながら遊牧地帯との境界を画している。城門には中華民国の察哈爾都統であった高維岳が1929年に揮毫した「大好河山」の四文字が雄渾な筆致で刻され、これより中華世界と遊牧世界を隔てる山河に分け入るのだ、という雰囲気伝わってくる。

大境門からほど近い市街地には、日本の傀儡であった蒙疆連合自治政府の影響下に設立された謀略機関、西北研究所があった。独自の進化論をとる

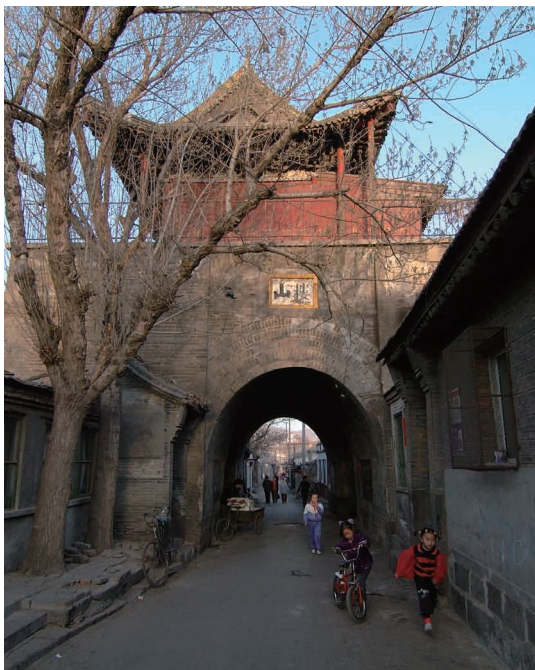
た若き日の今西錦司や梅棹忠夫ら京都学派の学者が参集して遊牧研究を行ったのだ。今は観光ルートからはずれており外国人の姿はほとんど見られないが、戦前の一時期、張家口には和風旅館や料亭が軒を連ね、日本との深い縁を結んでいた。せめて西北研究所の跡地だけでも確認しようと歩きまわってみたが、それらしい場所を探し当てることができなかった。

城壁を後にして、西太平山を這う長城を見ながら水母宮にむかう。途中、ロバに引かれた荷車を追い越した。荷

▲西太平山の尾根を這う長城  
張家口では、まだロバが活躍している。荷車の背後に見える長城は水母宮のある臥雲山まで続いている。



◀鼓樓  
城郭は下堡の核をなし、東西南北にアーチ型の道路が穿たれている。車が通らないので、子供たちの遊び場になっている。張家口の歴史はここから始まった。



車の向こうに尾根を走る長城の雄姿が見える。水母とは「水母娘娘」のこと、水の精とでも訳せばよいのだろうか。その水母娘娘が西太平山につらなる臥雲山を越えたとき、にわか喉の渴きを覚えた。付近には一滴の水もなく、娘娘が眼下の山肌を指さしたところ土が裂け、岩が割れて泉が滾々と湧き出したという神話がある。

それはミネラルが豊富な甘い水だった。硫黄やアルミ成分も含まれていたので、毛皮のなめしに使うと良質な皮革ができたらしい。こうして張家口に産業が勃興し、「毛皮の都」と称されるようになったというのだが、はたして本当かしら。産業が興ったのは、満州の狩猟民や草原の遊牧民との間で、古来、毛皮の交易が盛んだったからにちがいない。しかし、この街の発展は水母娘娘の功績に帰したほうが、なによりお伽めかしくて楽しいのだ。

神話から現実にもどる、市街地にむかう。清水河畔の市人民政府前広場には、今も毛沢東の巨像が立ち、張家口の発展を見守っている。広場の端から商店や屋台が密集する繁華な通りを抜

けていくと、やがて鼓樓を中心として旧市街がひろがる。このあたりは下堡

とよばれ、明代には大境門を守った辺境防衛軍が駐屯した所だ。張家口の発展は一边が2キロほどのこの地域から始まり、やがてその北側に新たに上堡が築かれ、数百年をかけて現在のような街並みが形成された。

夕方の斜光をあびる鼓樓をながめてみると、子供を連れた老人が「大境門ではなく、ここが本当の張家口なんだよ」と説明してくれた。敵とは日本軍のことか、それとも国民党の軍隊なのか。八路军は1945年8月に大境門から入城し、はじめてこの街を日本軍から解放した。そして48年12月には、人民解放軍が今度は大境門から国民党の将兵5万人を駆逐し、2回目の解放を勝ち取っている。

毛沢東はそのどちらのとき、鼓樓の司令部で作戦の指揮をとっていたのだろうか。いずれにしても張家口はわずか3年の間に、共産軍によって2度も解放されたのだ。広場の毛沢東像を未だに撤去しない理由が、なんとなくわかるような気がするのである。

中村達雄（なむら たつお）◆ラジオペキン、オリンピック、博覧会などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、明治大学非常勤講師。